

海 辺 の 生 活

Dreaming of a Life by the Sea

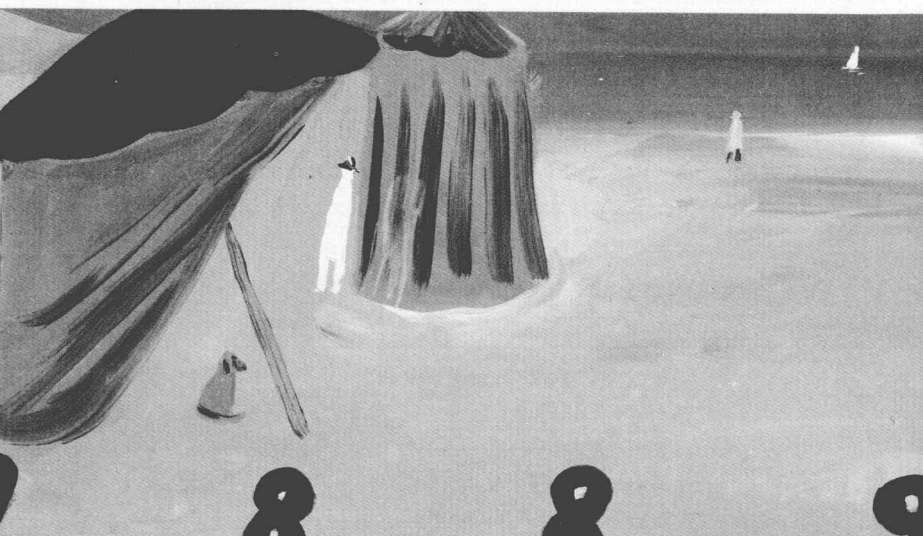


新井 満

海辺の生活

新井満

文藝春秋



海辺の生活

一九九一年三月三〇日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著 者 新 井 満

発 行 者 豊 田 健 次

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印 刷 大日本印刷
製 本 矢嶋製本

© Arai Man 1991, Printed in Japan
ISBN4-16-312410-1

万一、落丁乱丁のあった場合はお取替えいたします

著者紹介

一九四六年、新潟市に生まれる。上智大学法学部法律学科卒業。七〇年、株式会社電通入社、現在に至る。故森敦氏と出会い、「月山」に触発されて「組曲・月山」を作曲、コンサートを開催。またシンガー・ソングライターとして幾多の作詞作曲を手がけた。電通では映像プロデューサーとしてBGV・環境ビデオの新ジャンルを開発し、多数の作品を制作。以後、エッセイや小説の執筆活動を始め、八八年、「尋ね人の時間」で第九十九回芥川賞を受ける。主な著書に、「ヴェクサシオン」「サンセット・ビーチ・ホテル」「尋ね人の時間」、CDブックの「サティ紀行」などがある。

海辺の生活・目次

第1章	宇宙飛行士の帰還	7
第2章	関入者	27
第3章	不思議なご縁	46
第4章	三匹のエイリアン	69
第5章	不幸論	90
第6章	桜の消息	112
第7章	赤と黒	134
第8章	佐渡島	156
第9章	海から届いた手紙	178
第10章	遠い花火	202
第11章	富士山	225
第12章	グノシエンヌ・第五番	248
「あとがき」にかえて		274

装
幀
司
修

Dreaming of a Life by the Sea

海辺の生活

第1章 宇宙飛行士の帰還

桜木三郎は毎朝八時過ぎに家を出ると、駅につづく道を十五分ほど歩く。

桜木の家は丘の中腹にあって、駅はふもとにある。だから坂道をゆるゆる下ってゆく往路は、はなはだ楽で良い。反対に坂道を登らねばならない帰路は、往路で楽した分だけしんどいことになる。いいこともあれば悪いこともあり、どうあがいたところで所詮はプラス・マイナス・トントンであるという人生の真実は、通勤ひとつ取ってみても明らかなのである。

私鉄に乗り込む。

途中、地下鉄に乗り換える。

築地にある会社まで一時間半かかる。

通勤するサラリーマンには色々なタイプがある。まず保守派。

「俺はな、電車の中では浮気をしないんだ」

「うわき？」

「この七年間、前から二両目の二つ目の入口から入って進行方向に向かって左側四番目の吊革以外の吊革には決してぶら下がらんのだよ。どうだ貞淑だろう」

そういう男を桜木は知っている。ついでに言えば「貞淑」とは女性の操が滅法堅いことを指すのであって、男の言い草としてはちょっとおかしい。いや、そうではないか。もしかすると彼は、電車の吊革の方にこそ「貞淑」を期待し、感じようとしているのかもしれない。

「たまに先客がいてね」

「そりゃいることもあるだろう」

「こちらの気持も知らないで、失礼千万なやろうだとは思わんか」

「まあまあ」

「吊革も吊革さ。俺というものがあんなら、よそのやろうをぶら下げたりしてだねえ」

「まあまあまあ」

そういう朝は一日中気分がすぐれないという。笑ってはいけない。毎朝同じ通勤電車の同じ吊革にぶら下がることは、彼にとって欠くべからざる一日の通過儀礼なのである。心臓に大小

があるならば、人間の体内を走る血流の速度も百人百様千差万別ということであろう。

生活にはリズムがある。

それは正確に刻まれねばならない。

生活には速度がある。

それは常に一定に保たれねばならない。

その画一性こそが彼の健康保持の秘訣かもしれぬではないか。

「そういう人間のことを僕らの業界用語で何て言うか知ってる？」

C Mソングのアレンジャーをしている友人が桜木に教えてくれたことがある。

「何て言うんだい」

「イン・ポ」

「え」

一定の速度を保って演奏することを「イン・テンポ」と言うのだそうだ。略して「イン・ポ」。

そういえばC Mソングのレコーディングの折、コントロール室にいるアレンジャーの彼がスタジオ内の演奏者たちに向かって、

「十六小節まではイン・ポで行きますんで、よろしくう！」

などと叫んでいたことがあった。

通勤の保守派Ⅱイン・ボ。

通勤の革新派……（こちらの方は何と呼ぶのだろうか聞きそびれた。アウト・テンボなどと呼ぶのだろうか、良くわからない）。

桜木はどちらのタイプか。

少なくとも通勤電車に関する限り、桜木はイン・ボではない。一両目に乗ることもあれば三両目のこともあり、わざわざホームを端まで歩いて最後尾に乗り込むこともある。

なぜか。

イン・ボで通勤していると、どうしても顔なじみができてしまう。夏なら夏で、

〈今日も暑いですなあ……〉

冬なら冬で、

〈今日も寒いですなあ……〉

顔みしりと視線が合えば口には出さずとも、つい目と目で挨拶してしまう。それが、うっとうしい。

その日の気分で乗り込む電車のハコを替えている限り、そのうっとうしさからは免れることができる。そればかりではない。途方もなく興味深い人物たちと遭遇することもできるのだ。

ゆえに通勤のスタイルに於て、桜木は乱調ということになる。乱調こそが健康保持の秘訣なのである。健康のために、乱調は毎朝規則正しく実行されなければならない。言わば、

“画一化された乱調”

待てよ。そうであるならば桜木もまた、一人の堂々たるイン・ポであると言うべきかもしれない。

「ちゃんと、読みましたか？」

「読んだあー」

吊革にぶら下がっている桜木の眼前に、母親とその息子らしき少年が並んで坐っている。母親の年齢は二十代後半といったところか、ふっくらと色白でなかなか上品な顔立ちである。美形と言ってもよろしい。一方、息子の方は色浅黒く負けん気の強そうな顔立ちをしている。父親似なのだろう。年齢は七歳くらいか。制帽をかぶり制服を着ている様子を見ると、おおかたこの私鉄沿線にある名門私立小学校に通っていて、それを若い母親が送っているのであろう。

母親は、少年が両手に持って読んでいた本をボタンと音立てて閉じさせ、膝の上に置かせた。本の題名は桜木が立っている位置から判読するのはむずかしいが、どうやら日本昔話の類のようである。

「アキラ君、それじゃあ今読み終えた昔話の荒筋を、教室でみんなによくわかるようにお話ししてみようだい。わかった？」

母親のしゃべる声は良く通るソプラノで、しゃべり方によどみがない。母親というよりは幼児教育に熱心な女教師を連想させる齒切れの良さである。

「ぜんぶ？」

「そう。頭からおしまいまで全部よ」

「そんなことできなあいー」

「何てこと言うの。始めから諦めてどうするのよ。アキラ君ならできる。きっとできるわよ。ママが聞いてあげるから、ほら」

少年はしばらく思案する。やがて観念したのか、こつくりを一つすると突然、素頓狂な声で、
「むかしむかしあるところにいー」

「アキラー そんな大きな声を出すんじゃないやありません。他の人たちの迷惑になるでしょ」

息子が出した声よりもっと大きな声を立てて母親が押しとどめる。息子は呼吸を整えてから、
先刻よりはよほど抑えた声で、

「むかしむかし うみべのあるむらに うらしまたろうというわかものが おりました……」
「はい。それから？」

母親と息子を取り巻く半径五メートル以内の乗客たちは、ようやくして了解する。少年がたった今読み終わり、これからソラでしゃべろうとしているお話が浦島伝説であることを。

乗客たちの形態は様々である。新聞を開く者、週刊誌や単行本の頁をめくる者。あるいは両の目蓋をつぶって無念無想の境地にひたる者。つまり目は活字に釘付けされていたり、閉じられていたりしている。しかし耳まで閉じられているわけではない。したがって母親と少年のやりとりは聞くともなく聞こえてくるのである。いや、周囲をはばからぬ二人の大声によって否応もなく聞かされるはめになってしまったのである。

少年のお話はつづく。

「うらしまたろうが はまへ いくと はまべで わいわいさわぐこえが します。みると ぼうきれをもった こどもたちが いっぱきのゾウを いじめているのでしたあ！」

「ストップ」

母親が待ったをかけた。

「今、一匹の何をいじめているって言ったの？」

「ゾウだよ」

「象？」

「うん」

「どうして象なのよ。どうして浦島太郎に象が出てきたりするのよ。象なんかじゃないでしょう？ ほらほら海にいる動物でやさかなでもなくて……」

「クジラあー」

「違うつたら。アキラ君。どうして君はちゃんと本を読まないの。心を集中して、真剣に読んでいたらこんなこと何でもないじゃないの。いいかげんなんだからもう。ママ哀しくなっちゃう……」

「ええとええと」

「ほらほら丸くて固い甲羅があつて」

「カメって言わせたいんだろ？ ママは」

「なんだ。ちゃんと知ってたくせに」

「でも、うらしまたろうが、カメのせなかにのつたりしたら、カメつぶれちゃうよ。ゾウとかクジラのせなかなら、だいじょうぶだとおもうけど……」

「大きな亀だっているのよ」

「ウソおー」

「いるのッー とにかく浦島と言えば亀なのッ。最初からやり直しー」

興奮した母親の声が電車内に響く。